

解説

ナナカマドの実に聖なるものを感じる人

木村淳子第二詩集『美しいもの』に寄せて

鈴木比佐雄

1

木村淳子さんは、冬の北海道の厳しい自然の中で耳を澄ませて、春の到来を予感することを大切にしてきた詩人だ。冬を辛抱強く耐える時間があるからこそ、春という命の甦る季節への憧れが詩行に溢れ出てくるのだろう。木村さんの詩には、春への憧れと同時に命を育む時間として冬を慈しんでいるような命への深い祈りを感じることができる。第一詩集『そよとも風の吹かぬ日には』の中の同名のタイトル詩を引用してみる。

そよとも風の吹かぬ日には

そよとも風の吹かぬ日には

枯れ葦の、

時には白い腹みせて

魚の浮かぶ、

川面を見つめて佇っていよう

じっと佇ちつくすことで

時間をやり越し、

かすかな水底の動きに

目を凝らして

川面に移ろう影を

追おう

やがて

枯れ葦をそよがせて風が立ち、

淀んだ水路にさざ波が立ち、

白い腹みせて浮ぶ

魚が、

かすかに向きを変えながら

絡みつく水草をほどいて

流れて行く時、

影の中から立ち昇る光が
凍えた想いを融かして、
ひととき
浮び上がる優しい世界を
私のものにしてくれるかも
知れぬから

この詩の情景は、晩秋の冬に向かう川辺でみた魚が白い腹をみせて泳ぐさまが記されているだけで。しかしこの詩の背後から描写の中に深い祈りや精神性が予感されてくる。例えば「影の中から立ち昇る光が／凍えた想いを融かして、」などの詩行には、荒涼とした情景の中にも、光明を見いだして「浮かび上がる優しい世界を／私のものにしてくれるかも／知れぬから」と希望を差し出してくれる。移ろいゆく世界の中で何が大切かを木村さんは、静かに物語っているように思われる。奇をてらう派手な詩ではなく、目立たない地味な存在を見つめて、正攻法で内面に真直ぐに語りかけてくるのが木村さんの詩法なのだ。晩秋の中に冬を飛び越えて春の光を感じているような「優しい世界」を開示してくれている。

2

木村さんの名前を初めて耳にしたのは、二〇〇

七年に刊行された『原爆詩一八一人集』英語版を翻訳する際の訳者候補の一人として名前が挙がった時だった。一度は引き受けてもらえることになっていたが、仕事などの関係で最終的に辞退された。『原爆詩一八一人集』日本語版は八月六日に刊行されたが、そのすぐ後に木村さんが翻訳した『ロッセ・クラマー詩選集』（土曜美術社出版販売）が刊行されて本人から贈られてきた。ロッセ・クラマーの両親は、ナチスに虐殺されたユダヤ人だ。彼女はユダヤ人たちが子供たちを守ろうとした児童救援船によってイギリスに送られた一万人の子供の一人で、当時十五歳だった。後書きによるとドイツ語を母国語とするが後にイギリスの高名な詩人となるロッセ・クラマーの詩集を、木村さんは偶然にロンドンのピカデリー・サーカスの大きな書店で見かけたという。その詩集に感動し、手紙を書いてロッセ・クラマーと交流が開始されて翻訳詩集が実現したそうだ。その翻訳詩集の二番目に置かれている詩「最終的な解決」を引用してみる。

最終的な解決 ロッセ・クラマー

木村淳子／

ドロシー・デュフル共訳

先ほどから彼らは雑草を刈っている

小道のカモミールは

黒いアスファルトの下に埋められてしまった

あの香りは母がせんじてくれた

痛み止めのお茶を

思い出させてくれたのに

草を刈って 小道の雑草の

息の根をとめてしまった あの人たちは

花の姿に気づかなかったのだろうか

痛みを抑える薬草を知らなかったのだろうか

よく磨かれた電話機で

虐殺を命令したあの人たち―

互いを石のように無視しあう時代には

それはいとも容易なことだったのだろうか

ロッテ・クラマーの詩は平明でありながら、しかもナチスの行ったユダヤ人大量虐殺に対する深い根本的な問いを秘めて提示されている。木村さんはその詩の魅力を発見し、日本に広めようと願ったのだろう。どうして一人ひとりでは善良な人間たちが、大量虐殺をいとも簡単に命令できたのか。その人間の奥底に潜む非情さや残酷さを直視し探るために、ロッテ・クラマーは小道の雑草である「カモミール」の存在を例にとり、人間が他の生きものの命を軽視する感受性と切り離せないことを告げている。また人間の感受性が野草とはいえ固有の名を持つ生物の多様性を認めない行動をとることの精神の荒廃を指摘している。人間が生きるものに序列を付けて恣意的な価値判断を絶対化することは、結果として人間社会においても人種や国籍で他者を差別することになり、その果てに大量虐殺が生れる下地があると語っているように私には思われる。木村さんがなぜドイツ系のイギリス人の翻訳をしたかを想像するなら、ロッテ・クラマーがナチスの行為を告白することだけでなく、人類的な立場で大量虐殺の意味を日常的な場所から問い続けていることを高く評価したからだろう。またロッテ・クラマーの静かな声である言葉遣いが、木村さん自身とも共通性を持っていたからかも知れない。

3

木村さんは二〇〇三年に英語詩集『IN THE WIND』を刊行している。三行詩の英語詩集であり、日本語訳でもある俳句が後ろに添えられている。Ⅲ章に分けられていて、Ⅰ章「SNOWY DAYS」は十三篇、Ⅱ章「IN THE WIND」は三十三篇、Ⅲ章「FLOWER IS GONE」は十篇の計五十六篇が掲載されている。英詩と日本語俳句は基底では繋がっているが、表現上では異なる別の作品である。むしろ英語と日本語の差異を際立たせ、二つの言語の相乗効果によって木村さんの詩的精神をより立体的に明らかにさせる効果があるように思われる。各章から二篇ずつを引用してみる。

Ⅰ章「SNOWY DAYS」

Red berries

of mountain ash shining

celebration of Epiphany

ナナカマド赤く輝き公現祝う

Accumulating sorrows

snow falls

darkness deepens

哀しみを重ねて雪のふりつもる

II 章「IN THE WIND」

Spring wind

gently touches the pinwheel

in a child's hand

幼子の手のかざぐるまをまわす風

Clouds floating

horses romping

breezy green shining

雲流れ馬戯れて緑の野

III 章「FLOWER IS GONE」

Darkness deepens

in the tiny garden

a flower falls

花一輪落ちて深まる庭の間

Pondering over your whereabouts

picking a flower

in the shadowy garden

しのびつつ日陰の庭に花を摘む

I 章の二篇冒頭の詩に出てくるナナカマドの赤い実の輝きを見て、木村さんはキリスト生誕の際に東方の三博士が訪ねてきた公現日（一月六日）を祝福していると感じている。木村さんはクリスチャンではあるが、詩を読む限り宗派にあまり捉われることなく、白銀の世界の中でナナカマドの赤い実の輝きの中に聖なる存在を感じて敬虔に生きてこられたのだろう。次の「哀しみを重ねて」で始まる詩篇も雪の白と暗闇の黒を対比させて、世界の深まる瞬間を切り取っている。木村さんの英語には、神という言葉はどこには出てこないが、神という聖なる存在が近くに住んでいる気がする。日本語の俳句には、神というよりも森羅万象の自然神のような存在が宿っているような気がする。同じ詩的精神でありながら二つの言語によって差異が生まれてくることはとても興味深い。

II 章の二篇の子どもの手にある「かざぐるま」をまわす春の風や、風の緑などの大気が移動することに木村さんは聖なるものの息吹のようなものを心底から感じているようだ。子どもとは亡くなった幼少の頃の妹さんを想起しているのかも知れないが、聖なるものが春の風を吹かせてかざぐるまを回すイメージは、新詩集の II 章の妹への鎮魂詩に繋がっていったのだろう。

III 章の二篇では、花を摘み花を添える行為の中に、死んでしまった存在や姿を見ることの出来ない神の存在を強く感じさせてくれる。そして捧げられた花ばなを見るために、暗闇や日陰の中に愛する存在が隠れていることを予感している。それらの死者や聖なる存在と豊かな対話をききと試みた結果がこの英語詩集になったのだろうと考えられる。その意味ではこの英文詩集は天と地、夏と冬、白と黒など両極端の世界の間の中に、神々しいものを発見してしまう自らの詩精神を確認するための痕跡だったのだろう。

新詩集『美しいもの』は一章「春の靴」十四篇、二章「月 妹に」十篇、三章「美しいもの」十篇などの計三十四篇から成り立っている。一章の冒頭の詩「晴れ間」は木村さんの冬の終わりから春にかけての季節感を最も鮮烈に記した詩篇だった。

晴れ間

雪があがって
 灰色の空のさけ目から
 のぞく 空の青みが
 力を増してくる

心もとなげだった一月の空は
 はにかみながらも
 自己主張する 二月半ばの色に変わり
 女たちは 祭りの雛に心を寄せる

三月 弥生の空は
 その深みに水を湛えて
 縛めを解かれた
 さかなたちを泳がせる

祭りの雛を
 水に流すと
 女たちの空は晴れ上がる
 いっとき 思いの中で春が生まれ

春の中で
 思いは 自在に泳ぎ回る
 さかな

雪の 晴れ間の

木村さんはきっとこの詩「晴れ間」を、冬の曇天の中に垣間見た「空の青み」から発想したのだろう。季節を先取りし、その春への憧れがこの詩を成立させているのだろう。「はにかみながら」の一月の空、「祭りの雛に心を寄せる」二月半ばの空、「縛めを解かれた」空の展開は、繊細な感受性の連なりだ。冬が厳しい北海道の風土だからこそ、現代では失われつつある季節の訪れへの感謝の心を宿した詩行が生み出されたのかも知れない。最後の一行「雪の 晴れ間の」がそのことを物語っている。また昔から過酷な冬を乗り切って桃の節句を迎えてきた女たちへの共感が詩行に溢れでている。一章は冬の終わりから春へ、夏からから晩秋へと季節が小刻みに進行していく。詩「春の靴」は「春の靴があるいていく」という一行から始まり、街を歩く靴が植え込みの緑などの春を発見する喜びを記したユニークな詩

だ。その他の詩も物を通して季節と対話をしていて、みずみずしい生活感が詩に昇華されている詩群だ。

二章「月 妹に」は、亡くなった妹を街中で幻視する詩篇が多く配列されている。詩「月 妹に」の一連目「月が 出ている／人ごみのなかから／妹の 白い顔があらわれる／地下鉄の駅」を読むと、生きることに苦悩した妹への木村さんの思いは、深層の中に刻み込まれていて無意識の内に現れてくるようだ。木村さんは幼い頃に妹とした雛遊びなどを回想しながら、今この世にあることの意味を問い続けているのかも知れない。妹への鎮魂の思いが木村さんの求め続ける聖なるものへの憧れに続いていったようにも感じられる詩篇群だ。

三章の「美しいもの」は、英文学者である木村さんがヨーロッパ、カナダなどに旅をして出会った人びとを記した詩篇や、アウシュヴィッツ、長崎、アフガンなどの悲劇を受けとめて、世界の苦悩を抱え込んだ硬質な詩篇が並んでいる。三章冒頭の詩「ヨーロッパに行ったことがありますか」は、ロッテ・クラマーを訪ねた時に交わした会話の意味を回想して書かれた詩だ。最後に新詩集『美しいもの』の同名のタイトル詩を引用したい。季節の美しさを描写しながらも「いちばん美しいのは／／槍で突かれて血を流すところ／流れ出る血のしずくは／／初冬の空に紅いナナカマドの実となり／私たちを高めへと引き上げてくれるだろう。」と語っている。英語詩のナナカマドと呼応するように、木村さんの中で「血を流すところ」とナナカマドの実は一体となり詩を書き生きる原動力となっているのだろう。季節感を大切に、聖なるものを内に秘めた多くの人たちに読んで欲しいと願っている。

美しいもの

花びらの間に 露の珠を宿して

開き初めた 六月の紅い薔薇

鳩羽色の空の下 静かに

色を深める 紫陽花の青

美しいものはまだまだあるが

いちばん美しいのは

槍で突かれて血を流すところ

流れ出る血のしずくは

初冬の空に紅いナナカマドの実となり

私たちを高めへと引き上げてくれるだろう。序 詩

球技

I 東京暮らし

おい 東京

転居

西武線

水曜日の焼き鳥

土曜日正午、蕎麦屋

豚くさい祝日

毒婦

ドラッグ・アイドル

新宿

保存方法

あなたは郷里でスープを

休暇はおしまい

出勤

II 列島

深夜便

山羊

潜水列島

感染

オフライン

連休

村を走る

農村の晩秋

お父さんは白い犬

傘

この坂道

いまだ前線は近く

III ころ

だいたい色の海

嘘

遺失

います、いますか

私的因果論

夏の裏面

秋の裏面

見えない

夜に引かかる

旅暮らし

パンツ

髭が伸びた分だけ

あとがき

略歴

詩篇を紹介

序詩 球 技

一年ぶりに帰った郷里

自動車工場とプロ野球の街

父母が暮らす家の裏の広い通りには

なぜか斎場がいくつも並び

葬式通り と呼ばれるようになった

葬式通り界限には

私と同じ年頃の男たちが何人も

親元に暮らしていて

不規則な時刻に非常勤の仕事に出てゆく

この秋

かつては日本で最も売れていた

国民車の輸出停止が検討され始めた

やがて街からは工場が消えるのだろうか

インドを走る車はインドの

ブラジルを走る車はブラジルの

工場で造られるようになる

私が絶望工場という本を読んだのは

東京の大学に出て間もないころ

父は工業高校出で

一工員で終わった

今 暖房の効いた部屋で

一年のプロ野球を振り返る

テレビ番組を真剣に見ている

チームは今年最後まで日本一を争った

郷里の熱狂がどれほどのものだったか
東京でキーボードを叩いていた私は
知らない

葬式通りを一時間かけて散歩してきた
スーパーマーケットでは
すき焼き用に牛肉が売られていた
老いた親と住む
非常勤雇用の息子たちも
すき焼きをつつくのだろうか
明ける年の希望を語るのだろうか
インドでもブラジルでも
ジンバブエでもトンガでも
明ける年の希望は語られるのだろう
絶望工場があちこちに建てられようと
そこにはボールがあり球技がある
ボールを追う子どもらの輝く目がある

「おい 東京」

おい 東京
おまえのふところに飛び込めば
きっと夢がつかめると
暮らし始めて二十年が経った

おまえの内臓はでかすぎて
深すぎて
いまだにその中で
浮いたり沈んだりしているだけだよ

はじめ考えていたことも
もう ときどき
忘れてしまうようになった

あの子と出会い
あの子を守ることだけは
がんばろうと思ったけれど
それもだめかもしれないんだ

おい 東京
そうすると悪酔いしないというから
今夜もきゅうりを齧りながら
おれはおまえに
おやすみをいうよ

「髭が伸びた分だけ」

占星術と処世術の街だ
そのどちらに依拠すればよいのか
迷い決めかねて
みんな口ごもり気味に
朝のあいさつをする

生まれ月を怨んだり
上司の言葉の裏を読んだり
そうしているうち仕事場から
でっかい夕日が見える時刻になっている

帰りの電車で目を閉じる
占星術と処世術
どちらに従っておけばよかったのだろう
出たとこ勝負で口走ってしまった
台詞を悔いても
もうシナリオは走り出してしまっている

コンビニで弁当を買う
きょう初めてなんの打算もなく
選んだ気がするチキンソテー弁当に
どんな救済を求めてしまっているのか

一日の終わりに鏡を見る

髭が伸びた分だけ

希望を控えめにしていたかもしれない

解説

平井達也詩集『東京暮らし』

現代社会の苦味とリアルな生活実感

佐相 憲一

詩集タイトルと裏カバーの収録作品タイトルを見ただけでも新鮮な関心を覚えたという声があった。好評の新刊詩集である。

「球技」「おい 東京」「転居」「西武線」「水曜日の焼き鳥」「土曜日正午、蕎麦屋」「豚くさい祝日」「毒婦」「ドラッグ・アイドル」「新宿」「保存方法」「あなたは郷里でスープを」「休暇はおしまい」「出勤」「深夜便」「山羊」「潜水列島」「感染」「オフライン」「連休」「村を走る」「農村の晩秋」「お父さんは白い犬」「傘」「この坂道」「いまだ前線は近く」「だいたい色の海」「嘘」「遺失」「います、いますか」「私的因果論」「夏の裏面」「秋の裏面」「見えない」「夜に引っかかる」「旅暮らし」「パンツ」「髭が伸びた分だけ」。

現代の働き盛り世代の生活の匂いが親しみ深く伝わってくる。日本の現代詩に生活感のない詩が多くなっている昨今、もちろん生活感を大事に書く詩人たちはいる。多くは退職者の日常や母親の子育てなどである。他方、壮年層や青年層の現役の勤め人の悩み多い生活や葛藤、人間関係、そこから見る社会的な実感などがピンピン伝わってくる詩というのは、残念ながらあまり見られない。その意味でもこの詩集は待望の書であろう。

この親しみやすさには、個人の生活から出発しながら社会の深部を見つめる批評眼の重みがある。その現実認識は鋭くシニカルである。この社会システムへの違和感とも言えよう。だからこそ、表現手法としては軽いタッチの語りなのだ。こういう技術は、本当に文学を愛する実力派でないと、また読み手のことを誠実に考える人でないと、使いこなせない。いとも簡単にやっているように見せるこの芸当が小気味よい。

詩集は序詩「球技」で始まる。東京暮らしの人が一年ぶりに郷里に帰る。(自動車とプロ野球の街)、車の豊田市もある愛知県の名古屋辺りであろう。企業社会と日本資本主義の象徴のような中京工業地帯である。彼はその郷里を次のように描写する。(父母が暮らす家の裏の広い通りには／なぜか斎場がいくつも並び／葬式通り と呼ばれるようになった／葬式通り界限には／私と同じ年頃の男たちが何人も／親元に暮らして／不規則な時刻に非常勤の仕事に出てゆく／この秋／かつては日本で最も売れていた／国民車の輸出停止が検討され始めた)。不況と格差社会と非人間的雇用によるさびれ方だ。それを理屈ではなく、生きている人間の実感から書いている。(父は工業出で／一工員で終わった)。作者は東京暮らしと郷里の父母と社会を考えながら葬式通りを一時間かけて散歩してきた／スーパーマーケットでは／すき焼き用に牛肉が売られていた／老いた親と住む／非常勤雇用の息子たちも／すき焼きをつつくのだろうか／明ける年の希望を語るのだろうか)。そうだよと共感する向きも多いことだろう。そのような悲惨な現実を見つめつつも、プロ野球の街で育った詩人は、サッカーなどボールで遊ぶこともたちに希望を象徴させる。グローバリズムの弊害著しい不平等世界の他国の人々にも連帯する視点で。(インドでもブラジルでも／ジンバブエでもトンガでも／明ける年の希望は語られるのだろうか／絶望工場があちこちに建てられようと／そこにはボールがあり球技がある／ボールを追う子どもらの輝く目がある)。

I部は「東京暮らし」。学生時代に郷里から出てきて二十年以上を首都で暮らしてきた人の生きた実感で、人間模様や社会の断面が語られる。〈おい 東京／おまえのふところに飛び込めば／きつと夢がつかめると／暮らし始めて二十年が経った／おまえの内臓はでかすぎて／深すぎて／いまだにその中で／浮いたり沈んだりしているだけだよ〉(「おい 東京」)。ほろ苦い。作者個人のことを書きながらも、詩の言葉は作者個人をこえて、読み手は自らの代弁者のような共感を覚えるのである。

続く諸作品で恋や仕事や時代社会の中での疎外感など、思うようにいかない現実とのたかかいが親しみやすいタッチで続く。

勤め帰りにすなぎもなど焼き鳥を齧りながら、そして行きつけのスナックのママとの会話に心癒やされながら、ブツブツぶやく「水曜日の焼き鳥」。〈かき揚げ蕎麦のつゆに／きのうまでの憂鬱を浸して／五十年でトッピングした生卵に箸を差す。／ターミナル駅構内の蕎麦屋に／忘却への意思がこもってゆく週末の「土曜日正午、蕎麦屋」。「豚くさい祝日」に好むというんこつ醤油ラーメンを〈濃いめの味にしてみらうのは／反応してこみ上がってくる吐き気／くらいでしか確かめられないものがあるから〉というくだりなどは妙にリアルでうなってしまう。コミカルな詩篇の中に、人生そのものに絶望してしまいそうになるのをこらえてたくましく生きる庶民の生活感が抜群のリアリティで描かれているのだ。

「毒婦」は地味だが、いい詩だ。〈テンさん〉という五十歳近い男性のことが描かれている。〈そろそろ誰かと一緒に暮らしていきたいと／町の結婚相談所に行ってみたという／でも俺エリートじゃないし／見栄えも冴えないし と／テンさんは焼酎を飲みながら少し笑う〉。聞けば、女性に騙された経験があるという。〈でもテンさんは女を信じたいと思っている／悪い女ばかりではない と／口には出さないけれど／カラオケで入れる歌でわかる〉。それでも〈ときには女に感謝さえする〉というテンさんへの作者の友情のようなものが読み手に温かく伝わってくる。〈それを愚かだというのは正しくない〉という作者の言葉。ここに読者は、冷たい社会の隅っこで騙されても夢を捨てずに人を信じて暮らしている人の、本当は叫びたいだろうところを代弁する詩人の言葉に、熱い共感を覚えるのだ。詩はテンさんの素朴な様子を描写して終わっている。今日の日本社会の孤独の様相の典型的情景であるとも言えよう。一般の人に伝わる詩だ。

ほかの作品も、作者や周囲の人々の大都会での生活が描かれていて、映画を観ているような鮮明さとやるせなさがある。

口語体の臨場感を効果的に使った手法のI部である。

II部は「列島」。ここから詩集は、口語に加えて、硬質な書き言葉と巧みな暗喩を駆使しながら、日本社会のさまざまな断面に入っていて状況を提示する。その問題意識と批評精神が光る。I部の気さくで生活感たっぷりな作者が、II部のドライな切り取りと暗示も書くことに、確かなものがある。

「深夜便」では不安な時代における伝達労働と夢が描かれる。

「潜水列島」の緊急事態は今度の震災にもつながる視点で描かれる。産業、工業の危機。〈基準や関係がゆがむ／何かが低くなっているのだ〉という二行がゲサリと突き刺さる。

伝染病パニックの当事者の状況を描いた「感染」、高度に発達した情報化社会の盲点のような恐怖をリアルに描いた「オフライン」、〈日ごとにシャツが汚れていく〉謎めいた〈渋滞〉状況の下での「連休」など。

そして、都市や村の閉塞感を描いた詩が続く。II部ラストの「いまだ前線は近く」の最後二行は日本の現状だ。〈たつぷりと湿気をたたえた空が／重たい色で覆い続けている〉。

III部は「ころ」。作者本人の日常に戻り、しみじみとした内省も見せる。苦悩を振り下げ、矛盾という文学の根本的なところに詩想が届く。苦悩しながらも恋愛などに元気を得てまた前へとすすむ心理は、今日の少なくない人々の代弁とも言えよう。

〈だいたい色の恥の海に／きのうも沈んだ。／なかまたちの言葉が／知恵の輪みたいにややこしかった。〉(「だいたい色の海」)。〈嘘はみな泣いている／真でありたかったけれど／強くないから／生きてゆくためには／嘘であり続けなければならなかった／そして嘘のまま死んでゆく〉という「嘘」もリアルだ。物事の本質を描く中に自己批評もあって、奥が深い。

詩集に恋愛の詩がかなり入っているというのも現代詩の世界では稀であり、この詩集の幅広さであろう。

「見えない」「夜に引っかかる」の二篇には〈まゆちゃん〉への語りかけが優しく綴られているが、詩としての独自のリズムと、言葉が持つふくらみに深い文学的センスがうかがえる。〈メガネを外したぼくも／メガネをかけたまゆちゃんも／うわあ 見えない／見えないけれど／二人で笑っている〉(「見えない」)。〈まゆちゃんはいろいろなものを／ていねいに磨いて 好きな色に塗って／でもいつもすぐにそれは／割れてしまうのだ／そんなことばかりなのだ／だから笑うしかないんだ〉。

「パンツ」のユーモラスな日常に、世界や社会への〈抗議〉と不安がさりげなく織り交ぜられている。

詩集最後の「髭が伸びた分だけ」のラストを引用する。

〈コンビニで弁当を買う／きょう初めてなんの打算もなく／選んだ気がするチキンソテー弁当に／どんな救済を求めているのか／
／一日の終わりに鏡を見る／髭が伸びた分だけ／
希望を控えめにしていたかもしれない〉

これは第一詩集だが、実は作者は小説の方で二〇〇三年に自治労東京文芸賞を受賞している。描写がリアルなのはそのようにコツコツと表現力を磨いてきたからだ。早稲田では文学を専攻したらしいが、異郷の大都会で生きるために公務員の仕事を選択し、働きながら人生経験を重ねた。社会に対する目もより鋭くなっただろう。そのような中で書いてきたからこそ、平井さんの詩には一般社会で苦闘している庶民の生活感に合った生きた言葉が響いているのだ。二十一世紀の社会の現実の中で光る、現代詩の“逸材出現”である。強くおすすめしたい。

黒い鳥の影が地を覆い

日暮れは早くなり

降り止まぬ大雨に大地は浸されて

すべてが押し流されてしまったが

私の心を占めるのは

あなたが約束された調和の国。

やがて秋草がそよぎながら

優しい花を咲かせる野原。

夏もまだというのに灼熱の陽に焼かれ

秋も来ぬというのに

ふいにされた穫り入れの

畑の入り口に立って思い巡らしている。